

元朝秘史モンゴル語に於ける oki (幹乞) について

小 沢 重 男

本稿は第三回国際モンゴル学者大会(1976年8月30日~9月4日、於ウランバートル)においてモンゴル語で行った研究発表を日本語に書き改め、あわせて、若干の補足を加えたものである。

[1]

現代モンゴル語(Орчин цагийн моногл хэл)の名詞語幹の中には、いわゆる「不定の н」(тогтворгүй н) 或いは「隠れた н」(нууц н) をもつ一群の語幹がある。

これらの語幹、例えば、морь~морин《馬》, ус~усан《水》, хэл~хэлэн《言葉; 舌》の如き語幹は、古くより、語幹末における $\bar{0}$ ~н の交替を示し、『元朝秘史』(МОНГОЛЫН НУУЦ ТОВЧОО) では、秣^モ騶 mori~秣^モ騶 morin, 兀速 usu~兀孫 usun, 客列 kele~客連 kelen 等の形が実証される。

然るに、『元朝秘史』には、一方、幹乞 oki~幹勤 okin 《娘》, 中合秃 qatu~中合屯 qatun 《后》, 中合 qa~中罕 qan 《王》, 古兀 küü~古温 küün 《人》, 可兀 köü~可温 köün 《子供》, 亦^イ兒格 irge~亦^イ兒堅 irgen 《民》, 撒亦 sai~撒因 sain 《好き(こと)》等々の語形も発見される。そして、この種の語幹は現代モンゴル語では、охь~охин, хат~хатан, ха~хан, ху~хүн, хүү~хүүн, иргэ~иргэн, сай~сайн のように $\bar{0}$ ~н の交替が見られず、常に -н (тогтвортой н—安定した н) をもつ語幹である点で、現代モンゴル語の観点からすれば、上記の морь~морин, ус~усан などの語幹とは区別されねばならない。

ここでは、このように現代モンゴル語に於ては「тогтвортой н」の語幹でありながら、秘史モンゴル語に於ては「тогтворгүй н」の語幹として用いられる、上述の若干の語の中から、特に幹乞 oki~幹勤 okin を取り上げて考えて見たい。

[2]

『秘史』の第53節(巻一、32葉~33葉)に以下の文章が見られる。

§ 53. 捕魚兒納活兒 闊鏈納活兒 中豁牙兒札兀^ハ刺 兀兒失温 沐^ム漣^シ捏^ニ不^フ坤 阿亦^ア里^リ兀^ウ楊

水名	海子	海子名	兩	間	河名	河名	有的	種	姓
Buyur naur		Kölen naur	qoyar	ǰaura	Uršiuu	mören-e	bükün	Airiud	

備^舌魯兀^傷塔塔兒 亦兒格捏 俺巴孩^{中合罕} 幹勤^{幹克抽} 幹額孫 幹 乞 泥 顏 許迭周
 種 姓 名 百姓行 皇帝 女 与着 自己 女子 自的行 送着
 Bujruud Tatar irgen-e Ambayaı qahan okin ögçü öesün okin-iyen hüdeju

幹^傷忽^{李命} 塔塔兒 主^{因亦兒堅} 俺巴孩^{中合罕泥} 巴^{舌里周} 乞塔敦
 去的 做了 種名 種名 百姓 皇帝行 拿着 契丹的
 odqu bolun Tatar Jüin irgen Ambayaı qahan-ni bariju Kitad-un

阿^{勒壇中合罕納阿}抽 幹^{傷中灰突兒} 俺巴孩^{中合罕} 別^{速台古温} 巴^{刺中合赤}
 金 皇帝行 将着 去的時 皇帝 姓氏 人 名
 Altan qahan-na abçu odquı-dur Ambayaı qahan Besütei küün Balayaçı

額^{勒赤泥額兒} 鳴^{詰列周亦列}命^{舌論} 中^{合不勒中合罕納} 朶^{羅安可兀敦} 敦^{蒼都}
 使臣行教 說 着 皇帝的 七箇 兒子的 中間的
 elçin-ier ügüleju ilerün Qabul qahan-u doloan köüd-ün dundadu

中^{忽刃刺蒼鳴詰列}論^{舌論} 哈^{兒班可兀敦} 朶^脫刺^{舌刺} 中^{合蒼安太子蒼} 鳴^{詰列客延}
 名 行 說 十箇 兒子的 內 名 行 說 麼道
 Qutula-da ügülerün harban köüd-ün dotora Qadaan Tajdz-da ügüle keyen

鳴^{詰列周亦列}命^{舌論} 中^{合木中渾中合罕} 兀^{魯孫額} 朶^{李魯周} 幹 乞 辺 幹^{額孫}
 說着 去 普的 皇帝 国 主人 做着 女子自的行 自己
 ügüleju ilerün qamuı-un qahan ulus-un ejen boluju oki-ben öesün

許迭^{恢辺} 納^{馬阿兒} 客^{薛傷坤} 塔塔兒亦兒格捏 把^{舌里黑蒼阿} 必 ……
 送的自行 我行 戒您 種名 百姓行 被拿了 我 ……
 hüdeküı-ben namaar kesedkün Tatar irgen-e bariydaa bi ……

【ブユル湖，フルン湖，両湖の間にあるウルシュン河（のほとり）に居るアイリウド，ブイルウド・タタールの民に，アムバガイ可汗は娘を与えて，自ら，その娘を送って行くことになって，（その時）タタールの民は，アムバガイ可汗をとらえて，漢土の金の皇帝のところへ連れて行く時に，アムバガイ可汗は，ベスト氏の人バラガチを使者として言い遣るに，カブル可汗の七人の子の中間のクトラに語るのには，“十人の子の中のカダアン太子に云え（とて云い遣るのには）普き可汗，国の主となりて，おのが娘を自ら送り行くを，われ（の例）を以て慎め，タタールの民に捕えられたり，我……”】

又，第 54 節（卷一，34 葉）には次の如き文章が見られる。

§ 54. 帖^{舌列察黑突兒} 也速該把阿秃兒 幹^{難沐}漣^{漣捏} 積^{犂兀闌} 迓^{步恢突兒}
 那 時分 名 河名 河 処 放鷹 行的時分
 tere çay-dur Yesugeı baatur Onan müren-e şibaulan yabuquı-dur

箴兒乞敦 也客赤列都 幹勅中忽訥兀楊 亦兒格捏扯 幹乞阿卜抽 額兀思格周
 種名的 名 種名 百姓処 女子要着 取着
 Merkid-un Yeke čiledü Olqunuud irgen-eče oki abču eüsgējü

阿亦速中忽宜 勻魯中合周 汪格亦周 兀者額速 汪格只速不失台 幹乞中合秃兀者周
 来的行 遇着 探着 看呵 顔色 別有的 女子 婦人 見着
 aisuqu-i joluɣaju öngējü üjeesü önge jisü busitai oki qatu üjējü

格兒秃里顔 中合秃鄰好温勒周 捏坤太子阿中合 余安 荅秃里台幹楊赤斤 迭兀辺
 家 自的 行 回 奔着 人名 兄 自的 行 名 弟行
 ger-tür-iyen qarın hauunlju Nekün taıdz aqa-yuan Daritaj odčigin deü-ben

兀都秃里楊抽 亦秃列主為。
 引着 来了。
 uduridču irejüüi.

【その時、イエスゲイ・バートル、オナン河に鷹を放ち行くに、メルキッド(族)のイケケ・チレド、オルクノッドの民より女をとり発ちて来れるに遭いて、さぐりて見れば、容色尋常ならざる女子^{おみな}を見て、ゲルに急ぎとりかえり、ネクン太子なるおのが兄、ダリタイ・オドチギンなる、おのが弟をつれ来れり】

更に、第 61 節(巻一、42 葉)、66 節(巻一、46 葉)にも、以下の文章が見られる。

§ 61. 也速該把阿秃兒 帖木真泥 也孫納速秃 不恢突兒 訶額命 額客因 脱兒古楊
 名 名 行 九才 有時 母名 母的 家
 Yesügei baatur Temüjin-i yesün nasutu büküi-dür Höelün eke-in törgüd
 幹勅中忽訥兀楊 亦兒堅途兒 納中合出納秃刺察 亦訥 幹乞中忽余速 客延 帖木真泥
 人 氏 百姓行 母舅 每行 他的 女 索 麼道 名 行
 Olqunud irgen-dür nayaču nar-ača inu oki yuyusu keyen Temüjin-i
 阿不阿楊 約兒赤罷。
 将着 去了。
 abuad yorčibaj.

【イエスゲイ・バートルは、テムジン九才の時、ホエルン母のさとオルクノッドの民のもとにて、その母方の親族より“女^{よめ}を求めん”とてテムジンをつれて赴きぬ】

§ 66. 幹乞亦訥兀者別速 你兀兒秃里顔 格秃列台 你敦秃里顔中合勒台 幹乞泥兀者周
 女子 他的 看呵 面 自的 行 光有 眼 自的 行 火有 女子 行 見着
 oki inu üjebesü niur-tur-iyen geretei nidün-tür-iyen ɣaltai okin-i üjējü

斡因秃里顔 斡羅温勅罷

心意自的行 教入了

oin-tur-iyān orounlba

【彼の娘を見れば、その顔に光ある、その眼に火ある娘(なる)を見て、おのが心に深く感じ入りぬ】

以上の文章の中から、斡乞 oki~斡勅 okin を取り出して見ると

- | | | |
|------|---|---|
| § 53 | { | 斡勅 斡秃抽 okin ögčü 《娘を与えて》 |
| | | 斡乞泥顔 許迭周 okin-iyān hūdejū 《おのが娘を送りて》 |
| | | 斡乞辺 斡額孫 許迭恢辺 oki-ben öesün hūdeküj-ben 《おのが娘を自ら送ることを》 |
| § 54 | { | 斡乞 阿卜抽 oki abču 《娘を娶って》 |
| | | 斡乞 中合秃 兀者周 oki qatu üjejü 《女子を見て》 |
| § 61 | | 斡乞 中忽余速 oki yuyusu 《女を求めん》 |
| § 66 | { | 斡乞亦訥 兀者別速 oki inu üjebesü 《彼の娘を見れば》 |
| | | 斡乞泥 兀者周 okin-i üjejü 《娘を見て》 |

以上の8例となる。これを整理して見ると、

- (1) oki abču, oki qatu üjejü, oki yuyusu, oki inu üjebesü (oki-ben öesün) hūdeküj-ben
- (2) okin ögčü (okin-iyān hūdejü)
- (3) okin-i üjejü

のように、oki, okin, okin-i の三形が——oki-ben と okin-iyān は、oki と okin の問題に帰着すると考えられるが、又、別の観点からの考察も必要かとも思われるので後述する——見られることになる。

この三者の中で(3)の okin-i は、いわゆる対格 (accusative case) の形であって、モンゴル語における対格語尾は、ある語の前に、その語を限定する語句がある場合に、その語に附されるのが一般であり、上の okin-i の場合も nidün-tür-iyen yaltaï——又、niur-tur-iyān gereteï も okin にかかる形容句である——という限定句が見られ例外ではない。

そこで、問題は、例えば oki ög- “娘を与える”, okin ög- “娘を与える” の二者の間には、何等かの意味上のちがいがあろうかということになる。この間に答えるために、我々は上の文章を詳しく吟味してみる必要がある。

先ず、(1)の oki ab-, oki qatu üje-, oki yuyusu-, 等々の oki について見ると、これらの oki は、いずれも、その文脈に於て、その時までには知られていない、何の限定もない、不特定の対象である。例えば、oki abču の oki はオルクノットの民の不特定のある娘であって、oki yuyusu

の oki も前以て定まった特定の娘ではなく、何の限定もないある娘である。又、oki inu üjejü の oki も Yesügei パートルにとっては、その時まで会ったこともない、その時まで知られていなかったある娘である。

この他、『秘史』の中に見られる「斡乞 兀者周 oki üjejü (娘を見て)」(巻八, 41 葉, 五行) や「斡乞 斡古耶 oki ögüye (娘を与えん)」(巻十, 11 葉三行, 13 葉一行, 巻十一, 5 葉八行, 8 葉四行など) の oki も、総て、上のように考えることによって無理なく理解することが出来る。

次に (2) の okin ögčü の okin について考える。この okin は §53 の原文を讀んでいただければ了解されるように、(1) の oki とは異なり、Ambayaï qa'an (《アムバガイ可汗》) の娘という、明らかに“特定の”娘なのである。

(1) の oki-ben ö'esün hūde- (《自分の娘を自ら送る》) と (2) の okin-iyen hūde- (《自分の娘を送る》) とは訳出すると上記のように同じになるが、その内容は異なる。(なお、-ben と -iyen については、“S. Ozawa, A Study of Some Reflexive-Accusative Suffixes in Middle Mongolian” 「言語研究」47 号参照)

上例 oki-ben… と okin-iyen… とを比較して見ると、oki と okin の文脈上での意味のちがいははっきりする。即ち、oki-ben の oki は一般論として“皇帝たる者、国の主人たる者が、自分の娘を自ら送りどけることはやめよ、私の例をもって戒めとせよ”という文脈において用いられたもので、oki は、例えば、アムバガイ可汗の娘のように限定された特定の娘ではない。然るに、(2) の okin-iyen hūde- の okin は、まさに“アムバガイ可汗の娘”という特定の娘なのである。oki と okin との差は、このようにその対象が「不特定: 特定」という点に求められると考えられる。

[3]

以上のように、語幹末に -n をもたない語幹と -n をもつ語幹との相違が、その文脈に於ける「不特定: 特定」の違いを表示するものとすれば、例えば qa~qan (《汗》), küü~küün (《人》), köü~köün (《子》), irge~irgen (《民》), mori~morin (《馬》), usu~usun (《水》), sai~sain (《好》) 等々の間にも上と同様の相違が存在したにちがいないと考えることは当然のことと思われる。

そこで、これらの諸語について多くの実例を引いて述べたいが、今回は時間的に余裕がないので qa (《汗》) と sai (《好》) 及び mori (《馬》) の三語についてのみ述べることにしたい。

『秘史』巻三, 50 葉に以下の文章が見える。

§ 126	成吉思 ^中 合罕泥 ^中	罕字 ^中 勅 ^中 合罷 ^中	客延	客 ^中 列亦敦	脱斡 ^中 里勅 ^中 罕突 ^中 兒	答 ^中 孩				
	太祖	皇帝行	皇帝	教做了	麼道	種名	人名	皇帝	行	人名
	Cingis qahan-i	qan bolqaba	keyen	Kereid-ün	Tooril qan-dur	Dayai				

速格該 中豁牙舌里 額勒赤 亦列罷 脱斡 舌里勒中罕 帖木真 可兀泥 米納 中罕
 人名 兩個行 使臣 去了 人名 皇帝 名 兒子 我的 皇帝
 Sügegei qoyar-i elči ileba. Tooril qan Temüjin köün-i minü qan

孛勒 中合中忽 奈 勺 忙 中豁勒 中合 兀格温 客舌兒 阿 中渾 塔…… 客額周
 教做的 好生 是 達達 皇帝 無每 怎生 過的 您 說着
 bolqaqu nai jöb monqol qa ügeün ker aqun ta keejü

【“チングス可汗を汗となせり”とケレイトのトオリル汗のもとにダガイ，スゲゲイの二人を使者に遣わせり。トオリル汗“わが子テムヂンを汗となせるは，まさによし，モンゴル(部)は汗なくして如何に生くべき，汝等……”と云いて。】

ここに見える「中合 qa」(汗，王)の意味するところは，《一般に王たるもの》の意味であって，特定の《汗》を指すものではない。“モンゴル部に汗たるものがないくて，どうしてこれからやって行くのか，生きてゆくのか”の意であって，qan ではなく qa が用いられているのは，このような内容を示したものに他ならない。

次の sai はどうであろうか。

『秘史』巻一，43 葉に以下の文章がある。

§ 63 也速該 中忽 蒼 必 額捏雪 你 沼兀敦 沼兀都列罷 必 察罕 升 中豁兒 納 闌撒 舌刺
 名 親家 我 這 夜 夢 夢 了 我 白 海 青 日 月
 Yesügei quda bi ene söni jeüüdün jeüüdüleba bi čayan šinqor naran sara

中豁牙舌里 阿 傷 渾 你 思 周 亦 列 周 中合 兒 迭 額 舌 列 米 納 秃 兀 巴 額 捏 沼 兀 敦 泥 顏
 兩 拿着 飛着 来着 手 上 我的 落了 這 夢 自的 行
 qoyar-i adqun nisjü irejü yar deere minu tuuba ene jeüüdün-iyen

古 兀 捏 鳴 詰 列 舌 論 納 闌 撒 舌 刺 耳 中合 舌 刺 周 兀 者 克 顏 不 列 額 額 朵 額 額 捏 升 中 豁 兒
 人行 說 日 月 行 望着 見 有 来 今 這 海 青
 küün-e ügülerün naran sara-i qaraju üjegden bülee edöe ene šinqor

阿 傷 中 忽 周 阿 赤 舌 刺 周 中合 兒 凶 兒 米 納 秃 兀 罷 察 罕 保 兀 罷 黠 巴 兒 額 列 撒 亦
 拿着 将来着 手裏 我的 落了 白 下了 甚麼 但好
 adquju abčiraža yar-tur minu tuuba čayan baquba yambar ele sai

兀 者 兀 魯 木 客 額 周 ……
 見 教 說着 ……
 üjeülümü keejü ……

この文中の最後のあたりに見える yambar ele sai üjeülümü は，モンゴル人民共和国の第一

級の文献学者 Ц. Дамдинсүрэн⁽¹⁾ 教授によって “ямар сайн тохиол учрах болов” (何かよいことに会うだろう) と解されているように、この sai は何かはっきりはしないけれども “よいこと” の意味であり、すでに予定されている、或いは、前から知られている “よいこと” ではない。

以上の二例—qa と sai—は -n のない語幹が文脈上、不特定な、前以て知られていない対象を意味するという、上記の仮説を支持しているが、もう一例 mori と morin を対照して例示しよう。『秘史』巻七、21 葉～22 葉の次の文章には、morin が二回現われている。

§ 193. ……中康中合舌兒中合納 帖舌里兀帖 乃馬納 中合舌喇兀勒 田迭 阿主兀 必答納
 山 名 的 頭 行 種 名 的 哨 望 的 那 裏 有 來 咱 的
 Qaŋqarqan-u teriu-te Naïman-u qaraul tende ajuu. bidan-u
中合舌喇兀刺 忽勒迭勒都周 必答納 中合舌刺兀刺察 你刊 升中忽刺秣舌麟 卯兀中罕
 哨 望 的 行 相 逐 着 咱 的 哨 望 的 行 一 箇 白 馬 歹
 qaraul-a hūldeldüjü bidan-u quraul-ača nigen šiŋqula morin mauqan
額箴額禿宜 乃馬納 中合舌刺兀刺 阿卜塔主為 乃馬納 中合舌刺兀勒 帖舌列 秣舌麟
 鞍 子 有 的 行 種 名 的 哨 望 的 被 要 了 有 種 名 的 哨 望 的 那 馬
 emeeltü-i Naïman-u qaraul-a abtajuui Naïman-u qaraul tere morin
 阿_卜抽 鳴_舌詰_列勒_都舌_論 ……
 要 着 共 說 ……
 abču ügüledürün ……

【カンカル^{カン}山の頂にナイマンの頭哨(尖兵)そこにありき、わが頭哨(尖兵)に追いついて、わが頭哨(尖兵)より、一匹の黄白色の馬、悪しき鞍もてるを、ナイマン(族)の頭哨(尖兵)に捕られたり。ナイマン(族)の頭哨(尖兵)その馬をとりて云うに……】

又、巻一、19 葉にも以下の文章がある。

§ 31. 帖迭亦兒堅 鳴舌詰列舌論 古温別兒 秣舌麟別兒 赤納 速刺中忽途兒 阿答里備由
 那 百 姓 說 人 也 馬 也 你 的 問 的 行 相 似 有
 tede irgen ügülerün küün ber morin ber činu suraŋu-tur adali bujyu

【その民の言うよう、人も馬も、汝のたずぬるに似たり】

上記、§ 193 の 秣_舌麟 morin も § 31 の 秣_舌麟 morin も、前後の文脈から不特定の未知の馬でなくいわば“特定の”馬であることが知られる。例えば § 193 の最初の morin は“わが

(1) Ц. Дамдинсүрэн, Монголын нууц товчоо. Улаанбаатар, 1957.

方の šinqula (《黄白色の》morin) であり、二番目の morin はまさに“その morin”であり、§31 の morin は“汝のたずねる、その morin”なること明らかである。このように、秣騷 morin (馬) は漠然と不定の馬をさすのではなく、文脈的にはっきりそれとわかる“特定の”馬を意味することが了解される。それでは秣騷 mori の方は如何。卷二、43 葉に見られる以下の mori は好例を提示するものと思える。

§99. 訶額命額客 鳴詰列論 可兀的 幹帖兒 薛里兀魯坤 客額 訶額命額客
 母名 母 説 兒每行 疾快 喚教覚来 説 母名 母
 Höelün eke ügülerün köüd-i öter seriülüdkün keed Höelün eke

幹帖兒古 孛思畢 帖木真壇 可兀揚 幹帖兒連古 孛速阿揚 秣騷的顏 把里周
 疾快也 起了 人名等 兒每 疾快也 起了 馬每自的行 拿着
 öter kü bosbi Temüjin-tan köüd öterlen-kü bosuad morid-ıyan bariju

帖木真 你刊 秣騷兀訥罷 訶額命額客 你刊 秣騷 兀訥罷 中合撒兒
 人名 一箇 馬 騎了 母名 母 一箇 馬 騎了 人名
 Temüjin niken mori unuba. Höelün eke niken mori unuba. Qasar

你刊秣騷兀訥罷 中合赤温 你刊秣騷兀訥罷……中略……孛兒帖兀只捏 秣騷 都塔罷
 一箇 馬 騎了 人名 一箇 馬 騎了 婦人名 行 馬 闕了
 niken mori unuba Qaçiun niken mori unuba Börte ujin-e mori dutaba

【ホエルン母の言うよう、“子等を、とくに目ざましめよ”と云いて、ホエルン母はすぐさま起きぬ、テムゲン等、子等はたちどころに起き、馬をとりて、テムゲン（一頭の）馬に騎れり、ホエルン母（一頭の）馬に騎れり、カサル（一頭の）馬に騎れり、カチウン（一頭の）馬に騎れり、……ボルテ婦人に馬かけたり】

この文章は、若き日のテムゲンが、一日、朝まだきにタイチウド族の急襲にあい、母のホエルン、妻のボルテ、弟のハサルなどテムゲン家、一家をあげてフルカン・カルドン山を目指して逃走するくだりの一文であり、テムゲンをはじめ総てのものは馬にのったが、妻のボルテにだけは馬が足りなかったことを記している。ここには“誰々は niken mori unaba (一頭の馬に騎った)”という表現が数回ならず現われている。この niken mori unaba は上に《一頭の(niken), 馬(mori)に騎った(unaba)》との訳をふしたが日本で言えば、単に《馬にのった》と訳せば足りるところで、“テムゲンは馬にのった、ホエルン母は馬にのった、ハサルは馬にのった……(だが)ボルテには馬が足りなかった”と解するのが、日本語としての理解としては妥当な線である。

さて、この mori (馬) は、上述からすでに明らかなように、何も“特定の馬”ではなく、要

するに“馬にのった”の“馬”は文脈上別に前から知られていた、特別の馬でも何でもなく、ただ動物としての“一般的な馬”の意味であって、前例の morin とは、はっきりした対立を示している。

[4]

元朝秘史モンゴルに見られる以上の如き事実から、次の仮説を導き得るのではなかろうか。

『中世モンゴル語以前の古期モンゴル語の段階に於ては、事物を叙述するに際して、その事物が、文脈上（或いは発話の場に於て）特に限定されることのない対象、又は文脈上初出の対象と文脈上（又は発話の場に於て）限定された、特定の対象、又は文脈上既出の対象との二類を分けて表現する言語的習慣をもっていた。そして、前者の対象を表示する場合には、その事物、対象を表わす名詞類の語幹そのままを用いたが、後者の対象を表示する際には、その語幹の末尾に〈n〉を附して表わした。即ち oki~okin, qa~qan, mori~morin, saj~sajın の語幹対立は、このようにして発生した』

母音語幹と n 語幹 (oki~okin 等) の対立は基本的には、このように考えられるのではあるまいか。

『秘史』の言語の中には、母音語幹と n 語幹との間に、すでに、このような対立を示さない例も発見されるが、これは、秘史モンゴル語がすでに、この二類の基本的対立が崩れはじめた時期の言語であったことを物語るものに他ならない。

現代のモンゴル語、例えばハルハ方言やチャハル方言などでは、mori~morin, usu~usun の如き交替語幹に於ける語幹末の -n の出現、不出現が、格変化に際しての音声面での現象としてとらえられているが、母音語幹と n 語幹の対立は、発生的には、そのような音声面での問題ではなく、言語における事物、対象の表現に際しての意味的差異の問題に帰さるべき性質のものと考えたい。

なお、この際、一つの疑問が当然のことながら起ってくる。それは、この二類の対立を表示するのに、子音で終る名詞類の語幹は、いかなる方策をとったかという疑問である。というのは、モンゴル語の音韻構造として、語末に二つの子音が重なることが許されず、ために子音に終る語幹には -n を附することは出来ないからである。

それでは、この場合は、どのような方法をとったであろうか。私見では、この場合には——即ち子音で終わる語幹の場合には——この二類の区別は〈子音語幹: 子音語幹+u/ü (接合母音)+n〉のように行なわれたものと考える。

子音で終る語幹、例えば niyur (顔), bilig (智) 等の語幹には -n をそのままつけて niyurn, bilign とすることは出来ない。しかし、接合母音(介入母音)——モンゴル語における介入母音は -u/-ü- が一般的である——を入れて niyur-u-n, bilig-ü-n とすれば、必ずしも -n を附す

ることは不可能ではない。筆者は、文語文献の中に、まだこの種の形を発見したとは云えないが、次の例は、そのケースに当たると云えるかも知れない。

筆者がモンゴルの友人の一人——氏は現代モンゴルを代表する言語学者の一人であるが——から頂いた書物の表紙の裏に、以下のような文章が見られた。

erkin ozawa tan-u biligün-ü qurča ildü-ber muḡqay toluḡai-ban qayalayuluy-a (尊敬すべき小沢、汝の智の鋭き剣もて、愚かなる、おのが頭をくだかしめんことを)

この中の biligün-ü qurča ildü-ber (智の鋭き剣もて) の biligün-ü (智の) の正確な文語形 (といわれるもの) は bilig-ün であって、(即ち、辞書類に見える形は bilig (智) であって) biligün ではない。biligün という形は、私の所有する如何なる辞書類にも見出せない語である。

然るに、このように現実に biligün が用いられているのは何故か。これには勿論意味があるわけで、この biligün は単に一般的な不特定の bilig (智) を意味するものではなく、“小沢、汝の” bilig なのであり、それは、まさに“特定の” bilig である。それ故、bilig に -n が附されねばならず、その際、直接 -n がつくことは許されないので、母音 -ü- を介して -n を附したものが biligün に他ならない。このように考えれば、この例 biligün は bilig に対する n 語幹とも呼べる性質のものである。

この他にも、筆者は「現代モンゴル語」の文献に於て、本来子音で終る語幹に -n の附された多くの実例を見ている。「現代モンゴル語」におけるこの種の用例は、興味ある事実を提供するが、基本的には本論で述べた「不特定: 特定」の対立に帰せしめらるべきものである。

このように見れば、上述の二類の対立は、古期モンゴル語の総ての名詞類の語幹に共通して見られた現象と考えて大過あるまい。

[5]

最後に、もう一つ残った問題に言及して本稿を結びたい。

上の oki~okin, qa~qan, saḡ~saḡn, irge~irgen などは、前述のように、現代モンゴル語では охь~охин, ха~хан, иргэ~иргэн のように交替することなく, охин, қан, сайн, иргэн のように <тогтвортой н> (安定した н) をもつ語幹である。『秘史』の mori~morin, usu~usun などは、現在でも морь~морин, ус~усан と交替する語幹であるから、oki~okin などのみが、どうして現在では“安定した н” をもつ語幹になり変わったかという問題が当然起ってくる。

この問題を考究するに際し、Ш. Лувсаншандан 教授の次の言は注目に値すると思われる。『古代モンゴルの、舌先の [n] で終った名詞類に属する諸語の中で、現代モンゴル語においては、一群の語幹では語末の [n] を常に保ち、他の一群の語幹では、ある場合には語末の [n] を失い、ある場合にはそのまま保たれている故に、舌先の [n] で終った総ての名詞類を <安定した [n] を以て終る語幹> と <不定の [n] を以て終る語幹> の二群に分けることが出来る。

《安定した [n] で終る語》は意味の面から見て kümün (人), ebiügen (祖父, 老人), emegen (祖母, 老婆), kürgen (婿), keüken (女の子, 娘さん, 可愛い男の子), noyan (貴族, 官人), qatun (后) の如く, ほぼ“人倫”を示した具象名詞, 又, ulağan (赤(い)), çayan (白(い)), noyuyan (緑(の)), yağan (桃色(の)), bayan (富める(人)), qoyusun (空の, むなしい), olan (多い), dögen (少ない) の如く, “ものの様態, 限度など”を示した形容詞である。

《不定の [n]》によって終った諸語は, modun (木), ebesün (草), usun (水), sün (乳), miqan (肉), morin (馬), qonin (羊), temegen (駱駝), imayan (山羊), ünegen (狐), çilayun (石), salkin (風) の如く, 大体に於て, “植物, 家畜, 物, 現象”の名詞である。

Лувсанвандан 教授のこの言葉は, oki~okin, qa~qan などの交替語幹を考慮されずに書かれたものではあるが, 現代語の観点から見れば“人倫”に属する語 oki, qa, irge などが, いずれも охчн, қан, иргэн となって《安定した н》をもち, saj~sajн も形容詞として常に н をもつ сайн であるから, 上の Лы 教授の言は, この場合そのままあてはまることになる。

それならば, “人倫”を意味する語幹はどうして《安定した н》をもつに到ったか——Лы 教授が本来的に -n をもった語幹と見ている kümün, qatun なども『秘史』では küü (古兀), qatu (中合秃) のように -n のない語幹としても現われる——がここで問われなければならない。更に, 逆に, “植物, 家畜, 物, 現象”などを表わす名詞類は, いかにして《不定の н》語幹になったか? この疑問にも答えなければならず, 更に, この不定の н が, 現代の諸方言では格変化に際して, それぞれ異なる現われ方を示すが, それは何故か? 等々, まだ残った問題は少なくはない。

これらの諸問題に対しては, 更に考究して稿を改めて言及したいと思う。

On a word “oki” in the language of “the Secret History of Mongols”

Shigeo Ozawa

We can find such nominal stems as alternate like oki~okin (girl, daughter), küü~küün (person), qa~qan (emperor), qatu~qatun (empress), irge~irgen (the people), sai~sain (good, the good) in the language of “the Secret History of Mongols” and the author of this paper tried to find the difference of meaning between the stems with -n, for example okin, küün, qan, qatun, irgen, sain and the stems without -n, for example oki, küü, qa, irge, sai.

As a result of this research, the author has been convinced that on the stage of old Mongolian the stems with -n expressed the definite objects under the given context but the stems without -n, on the contrary, the indefinite objects under the given context.

The author of this line clarified this fact by showing a lot of examples in this paper.